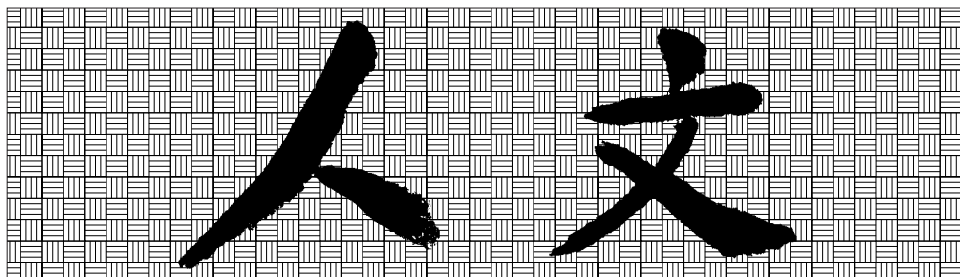


富山大学人文学部同窓会会報



No. 34

2012. 10. 1

富山大学人文学部同窓会

〒930-8555 富山市五福3190

電話 (076) 445-6143

FAX (076) 445-6141

E-mail alumnil@hmtu-toyama.ac.jp

題字 大島文雄先生

漢文訓読のルーツを辿る訪書旅行

人文学部教授 小助川貞次



大英図書館
大英図書館メインエントランス。早朝から多くの閲覧者が入館開始時間を待って列をなす。世界中から一流の研究者・学生が集まり、知的集合体そのもの。館内には閲覧室だけではなく、展示室や売店、カフェ、レストランがあり、図書館に
いるだけでも一日楽しめる。



今年の総会で
ご講演いただきます。
(詳細は8ページ参照)

フランス国立図書館
フランス国立図書館（リシュリユー館）は、まるで城壁に囲まれた牢獄のような建物。大英図書館と異なると館内には飲食設備はないが、周辺には日本食をはじめとする小さな飲食店が軒を連ね、世界中の食事を楽しめる。オペラ・ガルニエ、ルーブル美術館は徒歩圏内。

韓国語は夢を与えてくれる言語です

前田 真彦 (35回朝鮮語朝鮮文学)

一、朝文時代

時代は韓流です。テレビには韓国ドラマ、KPOPがあふれ、町でもハングルを見かけることも多くなりましたが、私が「朝文」で学んでいたころ、韓国語を専攻する学生は大変珍しかったです。大阪から富山にまで行ったのだから、富山でしかできないことをしようと、思い切って「朝文」を選択しました。当時は梶井渉先生と藤本幸夫先生、そして三、四年生合わせて、七、八人でした。コーヒーを飲みながらのゼミや、藤本先生の「三綱行実図」の影印本を使つての授業、藤本先生のお宅でのクリスマス会など懐かしく思い出します。

二、建国時代(国語教師として)

環境も大いに変化しました。昼間は国語教師、土曜日の放課後は韓国語教師を務め、楽しくも充実した生活を送ってききましたが、二足のわらじをはくのがもどかしく、二〇一二年四月、思い切つて建国を辞職し、韓国語の市民講座を立ち上げました。「ミレ韓国語学院」といいます。ミレとは未来という意味です。堺市に教室を構え、「教室授業」と「通信添削」という二本の柱で、受講生募集を始めました。

三、ミレ韓国語学院を立ち上げて

韓国語講座は韓流ブーム以降あちこちにできてきてはいましたが、そのほとんどはネイティブが運営する教室か、在日韓国人がボランティア精神で運営する教室で、そこに割つて入るのは、なかなか苦しい状況でした。「日本人学習者の強み弱みを知りぬいた指導」を掲げて、なんとか船出しました。

最初は、私ともうひとりの講師(教え子)の2人だけで始めた小さな学院も、大阪の中央梅田の大阪駅前第四ビル)に移転し、教室受講生と通信受講生を合わせると四百人の規模になりました。



中級レベルアップ講座での一コマ

四、韓国語は夢を与えてくれる言語

です。日本語と韓国語は構造も似ていますので、文字の壁さえ乗り越えれば、学習がどんどん進みます。日本人にとっては最も学びやすい外国語と言えるでしょう。

韓国語学習は、単なる外国語学習にとどまらず、隣国理解、異文化理解へとつながります。

この辺も他の外国語学習とは少し様子が違います。儒教や仏教が文化背景に共通に流れているので、大きな違和感なく韓国文化を受け入れることができます。そして旅行にも行きやすく、料理もおいしく、ドラマも、短期の語学留学やホームステイも：韓国語学習がもたらしてくれるものの豊かさに驚かされます。まさに「人生を豊かにしてくれる韓国語学習」です。

当時珍しかった「朝文」を選択した私に「先見の明」があったとも言えますが、何よりも富山大学が全国で4つ目の朝鮮語の専攻課程を開設したところに「先見の明」があったと言えるでしょう。

ミレ韓国語学院 <http://mire-k.jp/>

(河内長野市在住)



西田宏子先生の朝鮮美術史の集中講義で。中央左が藤本先生、中央右が筆者

富山大学卒業後、東京外国語

大学を経て、大阪の在日韓国人の学校「建国中等学校」に国語の教師として赴任し、まさに梶井先生の『朝鮮人学校の日本人教師』を地で行く格好になりました。私が「韓国人学校の日本人教師」になったのは梶井先生がお亡くなりになったすぐ後のことです。

韓国語を教えるようになった。勤務と並行して大阪外国語大学で修士課程、関西大学で博士課程を終えました(単位取得後退学)。

二〇〇二年ごろから韓流ブームが起こり、韓国語学習者も増え、在日韓国人社会を取り巻く

八雲随想 ―旅する人、蔵書の夢―

富山大学人文学部教授 村井文夫



一八九〇（明治二十三年）年、日本にやってきた小泉八雲（ラファディオ・ハーン）は横浜、松江を経て、熊本に転じている。この熊本時代の一八九三（明治二十六年）の夏、ふと思い立つて八雲は気楽な一人旅にでかけた。

向かった長崎では折からの暑気と肌にとわりつく湿気に苦しめ、西欧風のホテルでは細やかな心づかいの欠けた冷淡で形式的な扱いにすっかり嫌気がさした八雲であったが、しかしその後立ち寄った三角の日本式の旅館では、声も涼やかな女将をはじめとして、万事宜き届いたものでなしに、気分も持ち直した。それだけではない。旅の帰路、人力の車上にあって、世話にな

った宿の屋号「浦島屋」に触発され、以前から関心をもっていた浦島伝説が八雲の脳裏に鮮やかな印象を伴って蘇ってきた。さらにこれに加えて自らの失われた楽園である、ありえたはずの幼少時の記憶が重ね合わされ、ここに双方が混然一体となって、日本時代の第二の著作『東の国から』の劈頭を飾る一編「夏の日の夢」が生まれることになった。

一八九三年七月二十二日付けのチェンバレン宛のハーンの書簡にはこの旅の実際の様子が詳しく物語られているが、このチェンバレンのものした『日本昔話』に触れたことで八雲は浦島伝説に関心を寄せるようになったのだ。東京帝国大学で日本語の教授を勤めたチェンバレンには『古事記』の訳業もあり、八雲は来日以前からこれに関心を寄せ、来日後もすぐに手紙を取り交わすようになっていた。専門の言語学にとどまらず、広い読書人でもあったチェンバ

レンとは話が合い、一時期は頻繁に書簡をやりとりし、互いに手持ちの書籍のあれこれを貸し借りするほどだった。赤坂台町のチェンバレン邸を訪問したこともあり、この時には書齋にぎつしりと収まる蔵書の圧倒的な質の高さと、多彩な分野にまたがる選書の素晴らしさに羨望と賛嘆の念を久しくしている。これは八雲の集書と蔵書への志が深まる決定的な経験であったと考えてよいだろう。



ところで八雲のチェンバレン宛の別の手紙（一八九三年八月二十八日付け）に目を向けると、八雲は先の長崎旅行で立ち寄った西欧風のホテルについてこんなことを言っている。「長崎ホテルには大型の書棚が二つ並んで

いました。鍵のかかったガラス戸ごしに目を凝らしてみると、半分は思想関係、半分は文学関係の精選された書物が並んでいます。ヴォルテール、デイドロ、テヌ、ルナン、ミシュレ、さらにボードレー、フローベール、マクシム・デュ・カン。絢爛たるバルザックの数々の作品。自分で手に入れたと思うほとんど全部が一堂に集まり立ち並んでいる壮観さには言葉もありません。この蔵書を作り上げたのは、小生と合い通じる心の朋輩、絶対にそうでしょう」。

俄かには信じがたい話である。明治の長崎にこのような贅沢な書架が本当にあったのだろうか。これこそ「夏の日の夢」ではあるまいか。だがホテルの女主人によれば、いずれも彼女の亡夫が集めて残したものであるとのことであった。八雲の驚きと感動に思いを馳せながら、改めて「ヘルン文庫カタログ」を手にとってみると、上記の書目のほとんどが同「文庫」に収められているのが確認できる。してみれば、この「長崎ホテル」における装丁も見事な重厚な書物との出会いが、チェンバレンの蔵書とともに、「ヘルン文庫」

形成のもう一つの契機となったのではないだろうか。

今年の一月に「ヘルン研究会」のプレ・イベントとして「ラファディオ・ハーンの蔵書」に関して話をする機会を得た。そこではニュー・オーリンズ時代に出会った一人の読書家の書齋を埋め尽くす、二万冊ともいわれる蔵書に出会ったことが今日富山大学附属中央図書館に所蔵される「ヘルン文庫」形成の原点となったことを紹介した。だがその後の日本滞在中、チェンバレンの書齋の書架の前に立ち、さらに長崎のホテルで思いがけなくも重厚な書籍を収める書架を目の当たりにしたことで、蔵書の志が一層深まったことを付け加えなければならぬだろう。



新たな活動を進めるに当たって

人文学部同窓会会長 松 平 義 磨
(6回史学)

去る六月十三日(水)の午前、人文学部の立川健治教授と鈴木景二教授のお二人を案内して、「ホテル古志」を訪れました。富山ライトレールの終点岩瀬浜駅から徒歩約五分、富山湾からの風さわやかな小高い砂丘に立つ料理旅館です。

この建物は富山大学の前身校の一つである旧制富山高校の講堂として、大正の末に蓮町の地(現 馬場記念公園)に建てられたものです。昭和二十四年からは富山大学(文理学部)となり、昭和三十七年の文理学部の五福移転に伴い、全校舎が解体撤去されたのですが、この講堂や武道館などはそれぞれ別のところに移築されていて、今も在りし日を忍ぶことができます。

「ホテル古志」の主人、四十万義章氏によれば、先代が蓮町の自宅に富山大学生を泊めていた縁もあり、その講堂を買い受け、清水工具店(蓮町)により現在地に移設し、昭和三十八年十二月に旅館申請して開業し現在に



旧制富山高校講堂

至っているとのことでした。当時は「よいとまけ工法」で地固めして、大きな石を基礎として柱を乗つけた状態であるが、水捌けや風通しも良い立地条件で床下の湿気も少なく、建物の保存状況はとても良好とのことでした。

建物は曾ての講堂そのままではなく、内部も外部も旅館としての機能に沿うべく、数々の付帯工事が施されています。外観では切妻の上部の飾り窓に旧講堂の遺構を見ることが出来ます。また内部では階段が二カ所に設

置されていますが、その手摺りや支柱などは直に手に触れることができ、その構造や彫刻、材質などから大正時代の雰囲気や、そして九十年に及ぶ歴史の風格を感じ取ることができました。二階には大広間があり、隣接の広縁も合わせて、曾ての講堂の広さを想定することが出来ます。



話は二カ月ばかり前に逆上りますが、四月九日から五月二十五日までの間、富山大学五福キャンパスの中央図書館二階ホールで「富山大学展—140年に及ぶ歩みを知る」が開催されました。立川教授が中心になって「学生や教職員が自身の大学の歩みを知り、誇りを持つて欲しい」と企画されたもので、富山大学八学部、それぞれの前身校の設置期、発展期に関連した数々の資料が展示されました。

人文同窓会では、予てより活動の活性化策を検討していて、その一環として総会以外にも大学の先生、さらにはOBの話を

聞く機会を設けて、会員(特別会員の教員、準会員の学生も含めて)相互の交流を拡大促進する企画を進めていたところです。同封のはがきで十月五日までにお申し込みください。

時恰も前記のような経緯もあって、この新しい企画の第一回目を左記の案内の通り実施することとした次第です。大学の歩みを知り、会員相互の交流をより広く深くする好機となることを願っています。多数のご参加をお待ちしています。

人文の集い(仮称)第1回

- 日 時** 平成24年10月13日(土)
- 会 場** ホテル古志
富山市海岸通り新町4648
TEL 076-437-9111
- 講 師** 人文学部教授 立川健治先生
- 演 題** 「富山大学の歴史を訪ねて」(仮題)
- 日 程** 10:30~12:20 講演(含質疑)
12:30~14:00 懇親会
送迎バス 9:50 富山駅北口発
- 参 加 者** 人文学部同窓会員(教職員、学生含む)
旧制富山高校OB
富山大学同窓会連合会会員
- 懇親会費** 3,000円(学生は1,000円)

日本海の秋の味覚を堪能しましょう

あの頃 野上正毅(2回英文)



父の定年退職を機に一家四人は岐阜から古里富山へ帰った。

父はさらにダム建設の出稼ぎに単身赴任した。わたしは父の反対を押し切って富山大学を受験した。当時は教科の外に適性検査があった。合格発表は新聞で知った。昭和二十五年春のことである。生きていくのがやつの時代、なんとか家族に四年間の暇を認めてもらった。当然学費は自分で稼がねばならなかった。いわゆる苦学生である。四年間ガリ版筆耕、新聞配達、家庭教師など授業と調整しながら働いた。わたしは高山線笹津駅―富山駅―岩瀬港線で毎日通学した。港線はいつも学生たちで満員だった。

一般教養課程及び専門課程の

四年間、われわれ文理学部学生は連町キャンパスで過ごした。旧制富山高校校舎の教室棟で各教科授業、三百名収容大講堂では合同講義が行なわれた。わたしはアルバイトで欠講した分は友人からノートを借りて補った。授業料滞納で事務官が自宅へ取り立てに来たこともあった。

アルバイトと勉学の両立に精一杯努力したが困難なこともあった。

専門課程に入って、われわれ英文科生十四名は、同じキャンパス内の一隅に建てられた木造平屋建て(二教室と教官室)教室で学んだ。教授陣は「英文法詳説」で著名な吉川教授、米国帰りの新進気鋭の佐伯、吉田助教授ら十名、講義は活気に溢れていた。英米文学講座、英文法講座、英会話、英詩、教科教育実習など、作品購読では原書を輪番で読み、訳し、質疑応答して進めた。チャイナ、シェイクスピアに始まって、コールリッジ、T.S.エリオット、ゴルド

ワージー、トマス・ハーディー、ジョイス、ペーター、ホイットマン、フォークナー、モームと現代作家まで多くの作品を読んだ。中でもペーターの文章は難解で苦労した。

大学卒業後公私立高校教員として四十七年間勤務した。英語教員でよかった点は、①四度海外渡航したが、いずれも通訳担当で出張した。特に文部省派遣ではおみやげ代まで支給された。②英米文学作品を原書で楽しめた。③授業を通して生徒たちに英語の有用性、国際理解の醸成に一役かった。④国連機関ユネスコと邂逅、学校にユネスコ部を設け、百十数名の部員を育成。⑤わたし自身ユネスコ活動を始めて五十六年、生涯続ける積り。アルバイトで大学を卒業したが、これからのバイト精神で生きていく所存である。

(富山市在住)



研究室 英米言語 文化コース

教授 藤田 秀樹

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

英米言語文化コースでは、2009年に小川洋通先生、2012年に村上恭子先生がそれぞれ定年退職され、現在はイギリス言語文化分野の鈴木孝志、草薙太郎、奥村譲、恒川正巳、アメリカ言語文化分野の高安和子、藤田秀樹、大工原ちなみ、赤尾千波の8名の教員が教鞭を執っております。また、英語コミュニケーション担当のウィリアム・ホルデン先生が2012年に他大学に転任されたことに伴い、同年4月からは新任のジェラルド・タランデイス先生がこの授業を担当されています。現在、本コースには約80名の学生が在籍しており、相変わらず人文文学部の中の大所帯のひとつであり続けております。



写真に写っている場所は、卒業生の皆様にはお馴染みの、そしておそらく大いに懐旧の情を掻き立てるであろう212演習室です。現在も人文学部校舎二階の従来と同じ場所にあり、英米の学生にとってのアジールの空間となっております。二・三年前にエアコンが

設置され、もはや真夏の炎熱や真冬の石油ストーブの悪臭に悩まされることもなくなりました。快適な環境となった演習室では、一心不乱に生協弁当を掻っ込む姿、長椅子の上で悠然と午睡を貪る姿、真剣に授業の予習をする姿など(この演習室二景は目撃頻度の順に並べられたものではないことを申し添えておきます)、学生たちのいつもながらの日常が展開しております。

コースの授業の風景は、少しずつ変わってきているかもしれませんが。例えば従来の小説・演劇・詩といった文学テクストに加えて、映画のような大衆文化テクストも授業の素材として使われるようになってきました。もちろん英語と格闘しテクストを批評的・分析的に精読するという点では文学テクストを読み解くことと何ら変わりはないのですが、10年後くらいにはさらにコミック、写真、広告といった媒体が授業で扱われるようになっていくかもしれません。かつて、文学テクストを精読するというのは営みも決してなくなることではないでしょう。英学、米学はこれから様々な変容の波に揺られることになるでしょうが、学生たちとその波に身を任せつつ試行錯誤を楽しんでいきたいなどと愚考しております。

最後になりますが、卒業生の皆様のご発展とご健康をお祈り申し上げます。

瀧口修造との出会い

栄 夏代 (31回東洋史)

学生の頃の時間は、自分の掌の中にあって、ぼんやりとながめていたような気がする。今と同じ速さのはずなのに、なぜかゆっくりとして、深く濃密な時間を旅していたような気がする。いつのまに指の隙間から零れ落ちたのだろう。今では廊下の片隅にたまった時間をあたふたとスリッパで撒き散らすような生活を送っている。

そのような時、瀧口修造という人物の周辺に関わることになった。ご存知の方も多いと思うが、瀧口は富山出身で、シュルレアリスムの詩人、そして前衛芸術運動の理論的指導者でもあり実践者でもある。フランスの詩人・思想家アンドレ・ブルトンの創始したシュルレアリスムの活動と作品を日本に紹介し、交流を保ちながら、日本のシュルレアリスム運動を展開しようとしたが、大戦によって途絶。戦後にも新しい芸術運動に参加するなどして、さまざまな形でその可能性をさぐった。しかし、

このテーブルの上でもいいから、起こさなければならぬ……」瀧口の控えめで深い言葉に耳をすましていた時、小さな旅机上旅行くらいはできるようになってきた今日この頃である。



県立図書館で閲覧できます。

(富山市在住)

人文地理学
研究室の
思い出渡邊恵見子
(43回人文地理)

専門コースで初めの頃の実習に市内巡検、富山市内を歩いてその地域の景観や成り立ち方、現在にいたる地理的変遷の痕跡などを実際に見てまわったり、というものがありません。水内

先生のご指導のもと地図や資料を手に、授業ですけど毎回、同時期に人文地理に入った十一人全員で歩いていると、仲間みたくかと思ったりしました。

在学当時、人文地理学研究室は正門近く、以前の人文棟の三階奥にあり、浜谷先生はじめ前述の水内先生、のちに来られる先生方、OB・院・学部先輩の方と同輩後輩たちまで実に個性豊かな人物ぞろい、いつも誰かしらがいきました。私もすっかり気兼ねのない居場所感覚で、授業のないときもよく寄りました。四年になって、それまでの不勉強がたり、卒論がどうにもうまく進まず入口も出口もない



感じで落ち込んで、周りに元気づけていた大きなながらも、何とはなし研究室から足が遠のいてきました。

そんな折、下宿で受けた電話が、研究室にいる人たちで外へ出かけるが一緒にどうかという

お誘いでした。車を数台連ねての県内巡検、というよりドライブ気分で行きました。今はもうどこをどうまわって何を見たか断片的なのに、そのときはもう少しと望んで長時間にしてしまい、いろいろあって不快な思いをした人には申し訳ないのですが、連れ出してもらったおかげで私自身は、ふさいだ気もふしぎと晴れて、また頑張ろうと前を向くことができました。この様なきっかけはきっと自分一人ではつかめなかったでしょう。以後も問題は多々ありましたが、どうにか卒論を提出し(提出期限は阪神・淡路大震災のあった日でした。事の大事さに私などはあとから身につきませんでした)、三年次の巡検先が大阪・兵庫だったこともあり当日気持ちは卒論提出どころではなかった人もあったようです、無事に卒業できました。

今更ですが多くの方々の励まし、助力、そして大きな優しさに支えられていたのだなあと、感謝につきます。

ありがとうございました。
(長岡市在住)

交流いろいろ

出版祝賀会「浄土と曇鸞」

このたび、栗三直隆氏（8回史学）が桂書房（富山市）より「浄土と曇鸞」を上梓されました。

六世紀に他力信心を中国で初めて説き、法然上人の浄土五祖の第一とされている僧曇鸞の足跡を中国に尋ね、その生涯を明らかにした初の評伝です。

七月二十六日（木）に有志による出版祝賀会が富山自遊館で開催され、十三名が参加しました。まず栗三氏より多年にわたるフィールドワークの体験を基に中国社会の特徴をお話いただきました。



富山県日中友好協会事務局長、副会長も歴任され、中国各地を訪問された氏ならではの話を皆興味深く拝聴しました。

その後の昼食会では終始和やかに話がはずみ、三時頃散会しました。

出版物について

会員の皆様が本を出版された際は是非同窓会事務局にお知らせください。同窓会では「同窓会文庫」構想もあり、可能でしたら一部ご惠贈くださいますようお願い申し上げます。

紅葉狩り

昨年十月三十一日（月）同窓会有志七名が集まり「紅葉狩り」を楽しみました。

この日はあいにくの天候となりましたが、小川温泉で秋の旬の味覚と雨の紅葉を堪能し、お風呂に入るのを忘れてしまうほど話に花が咲き、大いに盛り上がりしました。

◎専攻、同期さまさまなつながりで同窓生の集まりを計画、開催されたときも、同窓会事務局にご一報ください。年一回の会報ですが、同窓生の皆様の交流の一助となるよう務めてまいります。

平成二十三年度

富山大学文学部同窓会総会

日時 平成二十三年十一月十二日
会場 ボルファートとやま

総会では、平成二十二年度業務報告、決算報告が承認され、金村理事、火爪理事、石坂理事、中川理事が新理事として承認されました。また、同窓会の活性化について検討されました。

吉田俊則人文学部長から、最近の人文学部の動きについてお話しいただきました。人文学部のホームページが十二月にリニューアル予定で、受験者増のため、県内高校を訪問しヒアリング、さらに全国の国立大学の人文学部のコンソーシアムの活動についてもご説明いただきました。

総会後、人文学部 鈴木景二教授による記念講演「千年前の仮名を読む」をお聞きしました。富山で発見された、全国的にも珍しい仮名文字が書かれた土器千年以上も昔、なぜ富山で見つかったのか。そもそも、何が書いてあるのか。なぜ解きの過程を追って、富山と日本の古代文化についてお話しいただき、参加者一同、古人の暮らしと精神

世界に思いを馳せました。

その後行われた懇親会では、年代をこえて同窓生が交流、親睦を深めました。

平成二十三年度 第二回理事会

日時 平成二十四年四月二十五日
会場 富山大学文学部多目的室

個人情報保護対策について協議され、同窓生の個人情報についてプライバシーポリシーを作ることになりました。また同窓会活性化についても話し合いました。

平成二十四年度 第一回理事会

日時 平成二十四年六月二十日
会場 富山大学文学部多目的室

平成二十三年度業務報告と決算報告が報告され総会原案として

て承認されました。「富山大学文学部同窓会、プライバシーポリシー（案）」が示され、総会での承認を経てホームページに公表することとなりました。同窓会名簿の発行については休刊という意見も出されましたが、総会ではかり、来年度の理事会で最終決定を下すことを決定しました。新たな事業として、講演会、学生と同窓生の交流会、同窓会文庫が提案され、できることから準備を進めることとなりました。

平成二十四年度 第二回理事会
日時 平成二十四年八月八日
会場 富山大学文学部多目的室

今広報4ページでお知らせしている講演交流会について内容を検討し、原案を固めました。

新刊案内

人文部職の方々の新刊を紹介します。

「のび太」が教えてくれたこと
ダメダメでも夢が叶う

横山泰行（名誉教授）／著
アスコム 2011年11月刊

ロシア古文鑑賞ハンドブック

中澤敦夫（ヨーロッパ言語文化教授）／著
群像社 2011年11月刊

浄土と曇鸞

栗三直隆（史学8回卒）／著
桂書房 2012年2月刊

都市言語の形成と地域特性

中井精一（東アジア言語文化准教授）／著
和泉書院 2012年3月刊

恋愛ニート 忘れた恋のはじめ方

永田優子著
浅野美和子（国文学6回卒）／ノベライズ
朝日新聞出版 2012年3月刊

IT女子がそっと教える究極の「女子力」活用法

酒井智美（中国言語文化47回卒）他／著
中央経済社 2012年4月刊

江戸の笑い 漢文で熟した富山の文化

磯部祐子（東アジア言語文化教授）／著
桂書房 2012年4月刊

ドラえもんのことば

横山泰行（名誉教授）／著
幻冬舎 2012年4月刊

平成24年度人文学部 総会へのお誘い

拝啓 今年の夏は格別の暑さとなり、残暑厳しき折、皆様にはお変わりなく、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、本年度の総会を、下記の要領で開催いたします。

多数の皆様のご参加をいただきたく、ご案内申し上げます。

敬白

人文学部同窓会長 松平 義麿

日時 24年11月10日(土) 午後1時30分

場所 ボルファートとやま

(富山市奥田新町81 TEL 076-431-1113)

講演

講師 小助川貞次教授

演題 漢文訓読のルーツを辿る訪書旅行

要旨

二十世紀初めに中国甘肅省敦煌で発見された五万点とも言われる大量の古文書類(敦煌文献)は現在、大英図書館やフランス国立図書館等で保管されています。この敦煌文献を漢文訓読の観点から詳しく調べてみると、日本の漢文訓読で使われる訓点の起源についていろいろ面白いことが分かってきます。そればかりか東アジアに広がる漢文訓読圏も、さらにはヨーロッパ諸言語(例えばラテン語)における同様の現象も見えてきます。講演では、これまでの訪書旅行の逸話も交えながら、漢文訓読のルーツについて楽しくお話します。

懇親会：午後4時

会 費：5000円(当日受付にてお納め下さい)

なお、同封のはがき〈現況通知・総会・懇親会出欠の回答〉を11月2日(金)迄に、ご返送の程よろしくお願いいたします。

会員各位へのお願い

会長 松平 義麿

同窓会活動の一層の充実・活性化を目指して、新しい活動の展開に努めています。

その推進には、なんと云っても会員の皆様のご支援・ご協力が必要です。

まずは総会を始め、これから実施する企画などに大いに参加いただきたいと思います。親睦を深め合っていただき、同窓会活動へも積極的にご意見やご提言など頂きたいものです。

そしてまた、年会費の納入に

是非ともご協力願います。

例えば、お知らせのタイムリ―化にインターネット発信も行っていきますが、その更新も随時して行きたいものです。更にはそれぞれの活動の充実のために、その財源の安定的な確保は欠かすことはできません。

重ねて皆様の絶大なるご支援をお願い致します。

なお、富山大学ではこのたび「富山大学基金」を設立して寄附金を募っています。関係書類を同封しますのでご協力のほどよろしく願います。

同窓連合会総会報告

2012富山大学同窓会連合会総会は8月2日(木)18時より名鉄トヤマホテルにて行なわれました。

北野会長の挨拶、遠藤学長の祝辞の後、議事も滞りなく進み

第5回のホームカミング・デーの開催を9月29日(土)に実施する方向で準備している旨の内容もありました。

記念講演は薬学科卒で現富山県薬事研究所所長で富山大学客員教授の高津聖史氏が「プロフェッショナルを目指して―研究

年会費の報告

昨年度の年会費納入状況をお知らせします。平成23年6月1日～平成24年5月31日迄、334名(終身会費7名、年会費327名)の方々から397,000円の年会費を納入していただきました。

ご協力を、厚く御礼申し上げます。

人文学部同窓会事務局

生活から学んで伝えたいこと―と題して、特に免疫学の方面から興味深いお話をなさいました。

懇親会には130名の同窓生、大学関係の方々の和やかな中にも活気に満ちた雰囲気盛りに上がつておりました。

一 計 報 一

謹んでご冥福をお祈り致します

廣田豊一(折号11) 平成23年
深川恵子(独文42) 平成20年12月13日
常木 清(英文1) 平成23年12月7日
森亜紀子(史文57) 平成23年3月11日
神保文乗(国文11) 平成23年6月6日
古澤亜希子(考古44) 平成23年3月11日

人文学部教官異動

(平成24年3月)

退官

○海老原 直邦(人間科学心理学)

○村上 恭子(英米言語文化)

○山本 孝一(ドイツ言語文化)

○北村 純一(ドイツ言語文化)

着任

○池田 真治(人間科学哲学)

准教授

○ジェリー・ランデイス・ジュニア

外国語教育専任教員・英語

編集委員

佐野 和美 田中 史子
成瀬裕美子 山藤 登
畠山 節子